

コミュニティ研究に立脚した災害復興の方法に関する研究

正会員 重村 力 君

本論文は、「東北大震災に関する緊急研究」を枕（1章）とし、「東北大震災津波被災集落緊急調査」を踏まえて「三陸集落再生の視点」を提示した上で、すなわち、本論文の基本的な視点を示した上で、「阪神淡路大震災に関する復興の研究」（2章）、「中越震災とジャワ島中部震災に関する復興と減災の研究」（3章）によってこれまでの経験と論考を整理し、「安全と共生の都市空間に関する原理的研究」（4章）、そして「集落の空間と共同性に関する原理的研究」（5章）をまとめている。

著者は、農村計画、都市計画、建築計画を含む幅広い領域で、地域空間・地域社会の記述・読解に関する研究を主導し、地域の生活環境の継承・改善につながる計画手法を展開してきたことで知られる。また、その研究成果を単なる知的集積に留めることなく、フィールドワークから設計計画への展開を意識的に展開してきたことが高く評価されてきている。本論文は、著者の長年にわたる集落研究および安全・災害復興問題に関する研究のエッセンスを集大成したものである。

第一に評価すべきは、防災・減災・災害復興を、ハードな側面、あるいは防災の視点、さらには都市計画技術的な視点から捉える研究が主流である中で、ソフト対応の有効性、とりわけ共同性の重要性を明らかにしていることである。本論文が特筆されるのは、それを一般的に論ずるのではなく、兵庫県南部地震そして新潟県中越地震、さらにインドネシアジャワ島中部地震についての具体的な経験と論考をもとに説得力をもって展開している点である。

第二に評価すべきは、第一の評価とも関連するが、防災・減災・災害復興におけるコミュニティの役割とあり方を明快に位置づけ、地域環境そして地域社会のデザインの方法論としてまとめあげていることである。すなわち、地域住民の生活の総体、さらには地域社会の構造の全体から復興を捉え直す枠組みを提示している点が高く評価される。本論文は、復興の現場が必要としている課題の解決につながる内容を多く含んでおり、東日本大震災の復興に役立つことが大いに期待される。

第三に、以上の評価のもとになっているのが著者の長年にわたる集落研究であることが示すように、本論文は、「共生的安全」という概念を提示することで、集落研究と災害復興研究との融合をはかろうとしているものとして評価できる。災害時に露わになるのは地域の日常における諸関係である。本論文は、そこにしっかり視点を据えた新たな研究分野の重要性をも提起するものである。

本論文は、以上のように、学術論文としてすぐれ研究成果を広く社会に還元しつつあること、新たな研究領域とその発展の方向性を指し示していること、さらにその成果の有効性を設計活動の中で実証しつつあることなどにおいて大きな価値を有している。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。